

I はじめに

明倫小学校では、研究主題を「『分かる』『できる』喜びを実感し、主体的に学ぶ児童の育成」とし、『分かる』『できる』をキーワードにした授業づくりを学校全体で進めている。特に今年度は、国語科の授業研究に力を入れ、「読むこと」や「書くこと」に関する授業研究を行い、効果的な単元構成や指導方法の研究を進めてきた。

「分かる、できる授業」を構築していくために、教師はまず授業の終末部分で児童が何が分かり、何ができるようになればよいのかを思い描き、そこにたどり着くための最もよい方法を考えることから授業の全体構想をするようにしている。また、実践の場面では、分かりやすくねらいを提示することを心がけている。さらに、授業のいろいろな場面で記述することを求め、記述力の育成にも力を入れている。

これから報告する実践事例は、明倫小学校全体のこれまでの取組から得た知見である、

①確かなねらいのもとに授業終末部分の児童の姿を想像し、そこに向かってまっすぐ進んでいく学習活動を展開することができれば、児童は「分かる」「できる」を実感することができる。

②その児童に合った丁寧な支援を積み重ね、よりよく記述するための技法を計画的に指導していくことができれば、児童の記述力は着実に向上する。

を生かすかたちで授業を構想し、実践したものである。

II 6年1組 国語科学習指導案

指導者 山村 義弘

1 単元 読み取ったことや感じたことを表現しよう 「この絵、私はこう見る」

2 指導の立場

○ 本学級の児童は、国語に関する力に概して不安を抱える。特に気になるのは、次の2点である。

① 目的に応じて、文章の内容を的確に押さえながら、要旨を捉えて読むこと

② 目的や意図、条件に応じて、書くための材料を収集し、伝えたいことを整理しながら記述すること

この2つの課題は、5年生時から顕著になってきたもので、改善されてきてはいるものの、依然課題として残っている。特に、②の「伝えたいことを整理して記述する」ことに関しては、苦手としている児童が多い。4月に行われた全国学力・学習状況調査において、国語のB問題「指定された条件に合わせて説明を書く」や、算数のB問題「言葉や数を使ってわけを書く」などで無回答が多く、正答率を下げる原因となった。

1学期には、修学旅行の魅力を伝えるパンフレット作りに取り組み、分かりやすい表現や、読者を引き付けるための表現の工夫について学び、学習の成果を生かしてパンフレットを作り上げた。力を付けてはきているがまだ十分とは言えない。国語の時間だけではなく、他教科の時間も使って、条件を満たしながら単文で考えをまとめる力を磨いてはいるが、前述したような課題が依然として見られるのが現状である。

本校正面玄関には、香月泰男画伯が自らの手で彫られた線刻壁画「愛情」があり、子どもたちは日常的に香月泰男作品の本物にふれている。また、4年生時の総合的な学習の時間には、香月泰男美術館に通って作品を鑑賞したり、香月泰男画伯の生き方について調べてまとめたり、その作品のもつ意味や世界にひたってきている。夏休み中に行われた世界スカウトジャンボリー地域プログラムの際には、外国からのお客さんを美術館に招き、作品の簡単な説明をする経験も積んでいる。子どもたちの香月泰男画伯の作品に対する思いは深く、関心は高いと言える。

- 本単元は、芸術的絵画に触発されて生まれる自分なりの感じ方やものの見方を大切にしながら、それを自分以外の人にも分かるようにまとめ上げ、相互に伝え合うという活動が中心となっている。本単元において重視したいことは、次の2点である。

- 提示されたさまざまな観点をよりどころにしながら分析的に絵画と向き合い、事実として自分が絵画のどの点に何を感じ、どのように意味づけたのかということに意識的になること。
- それらに基づきながら、自らの感じ方やものの見方を言葉で記述すること。

本単元では、単に絵の感想文を書くのではなく、自分なりの分析や解釈を読み手に納得してもらえるように書くこと、その中で、詳細に描写する力や自分の見方、感じ方をより正確に伝えるための表現力を培うことを主たる目的にしている。(参考:小学校国語 学習指導書6年)

- 指導に当たっては、まず、単元の初めに学習の全体像をつかむところから学習をスタートさせる。その中で、単元の最後で香月泰男画伯の絵から読み取ったことや感じたことを伝える文章を書き、それを絵といっしょに掲示し、香月泰男美術館の明倫小分館をつくりあげて知らせ、ゴール地点を常に意識しながら学習が進められるようにする。

教科書を使った学習の初めの部分では、絵画(「猿のいる熱帯の森」アンリ=ルソー)をコンピュータを使って電子黒板に映し、発見したことを自由に伝え合う活動を仕組む。ここでは、「何が」「どのように」かかっているか、絵からどんなことを感じるかなど、絵を見る視点を与え、気づいたことや感じたことをノートに書き留めていくことができるようにする。



書くことの本質を決める活動の後で、表現の工夫について、記述例や具体的な表現から学ぶ時間を取る。そうすることで表現方法を学んでいき、後の活動で様々な技法が使えるようにする。

実際に文章に表す段階では、教師が作成した記述例を使って構成のパターンを示したり、記述例に書き込みをして分かりやすくしたものと文章のフレームを教室前面に掲示したりすることによって、「絵から読み取ったこと」「絵から感じたこと」の二つを関連づけて文章に書けるようにする。

文章ができあがったら表現の工夫という観点で文章をチェックし、必要な場合は加筆修正する。その後、書けた者同士で文章を読み合い、同じ観点で評価することによって、自

他の文章のよさを発見できるようにする。

第3次においては、2次に学習したことをより確かな力として定着させるために、香月泰男画伯の作品を鑑賞し、読み取ったことと感じたことを文章で表現する。自分で文章をチェックした後、クラスで広くお互いの文章を見て回り、表現方法やものの見方が広がるようにする。最終的にはできあがった文章と香月画伯の絵をいっしょに掲示し、香月泰男美術館明倫小分館をつくりあげる。

3 単元目標

- ◎表現の効果を確かめたり工夫したりして書くことができる。
- 絵から感じたことの中から書くことを決め、全体を見通して事柄を整理することができる。
- 事実と感想、意見などを区別するとともに、必要に応じて絵の様子を簡単に書いたり詳しく書いたりすることができる。

4 指導と評価計画(全6時間)

主な学習活動	評 価
<p>1 単元の学習の全体像をつかんだ後、「問い」を立てながら絵から読み取ったことや感じたことをノートに書き出す。(2時間)</p> <p>① 教科書の絵を見て、感じたことを自由に話し合う。</p> <p>② 単元の学習課題を設定する。</p> <p>③ 教科書の絵に対して、読み取ったことや感じ取ったことを自問自答する形で、ノートに書き出す。</p> <p>④ 感じたこと、読み取ったことの中で、最も伝えたいことを選ぶ。</p>	<p>【関】 絵画に興味をもち、自分なりに問いを立て、絵から情報を読み取ろうとしている。(ノートの記述)</p>
<p>2 ノートの記述から書くことを決める。その後、記述例を参考にして表現の効果や工夫を考えて、文章を書く。(2時間：本時2/2)</p> <p>① 教科書の〈書き出しの例〉と〈記述の例〉、教師がつくった記述例を読み、自分が文章を書くときに参考にできるようにする。</p> <p>② 教科書の〈読み取ったことや感じたことを表す表現〉〈見る場所や見る方法を表す表現〉を読み、これらの表現のよさを確認する。</p> <p>③ 分量などの条件を理解して、絵から読み取ったこと、感じたことを文章に書く。</p> <p>④ 書き上げた文章を読み合い、自他の文章のよさを見つけたり、ものの見方を広げたりする。</p>	<p>【書】 読み取ったことと感じたことを書き分けている。(書いた文章)</p> <p>【書】 表現の効果を考えながら、文章の中で〈読み取ったことや感じたことを表す表現〉や〈見る場所や見る方法を表す表現〉を使っている。(書いた文章)</p> <p>【書】 表現の仕方に着目して助言し合ったり、絵の見方のよさを伝え合ったりして、表現方法のよさやものの見方を広げている。(発言、書いたもの)</p>
<p>3 香月泰男画伯の作品を鑑賞し、読み取ったことや感じたことを文章に表し、お互い読み合う。その中で表現方法やものの見方をさらに広げる。(2時間)</p> <p>① 香月画伯の作品を鑑賞し、読み取ったことや感じたことを短い文章にまとめる。</p> <p>② 書き上げた文章を読み返し加筆修正した後、全体で交流する。</p> <p>③ 香月画伯の作品について書いたものを清書し、絵と共に展示する。</p>	<p>【書】 香月泰男画伯の作品について書いたものに、加筆や修正を施し、文章を書き上げている。(書いた文章)</p> <p>【書】 表現の仕方に着目して助言し合ったり、絵の見方のよさを伝え合ったりして、表現方法やものの見方を広げている。(発言、書いたもの)</p>

5 本時案(第2次 2/2)

(1) 主眼 表現を工夫しながら、絵から読み取ったことと感じたことを関連づけて文章に書くことができる。

(2) 学習の展開

	学習活動・内容	支援(○)と評価(☆)	準備
㊦ あて (5)	1 本時の課題を知り、学習活動の見通しをもつ。 ・学習課題の確認	○ノートを読み返し、絵から読み取ったこと、感じたことを確認した後で、本時の課題を知らせ、学習の見通しがもてるようにする。 絵から読み取ったことや感じたことを友達に伝えるように工夫して文章に書き上げることができる。	学習課題
㊧ けん (20)	2 よりよい文章のポイント(評価の観点)を確認した後、文章を書く。 ・よい文章の評価の観点の確認 ・文章の書き方として満たしておかなければならない条件の確認 ・文章の作成	○評価の観点「書き出しの工夫がしてある」「見る場所や見る方法を表す表現がある」「読み取ったことや感じたことを表す表現がある」「詳しい描写や呼びかけるような表現を入れるなど、表現の工夫がしてある」を示して全体で確認する。 ○満たしておかなければならない条件、①主語と述語が正しい関係になっている。②文体が統一されている。③字数を示して確認する。 ○気軽に書けるように文章は百字詰め原稿用紙に書き、ラミネートシートにはっていくようにする。 ○書けていない児童には、書き出しの文章を与えたり、会話を通して読み取ったことや感じたことを聞き出したりして、作業が進むようにする。	・文章の条件を記した掲示物 ・記述例や文章のフレーム ・方眼用紙が挟み込んだであるラミネートシート ・百字詰め原稿用紙
㊨ かい (15)	3 できあがった文章を観点に沿って読み返しながらか筆修正をし、よりよい文章にする。 ・自分が書いた文章のよさと課題の発見及び確認 ・文章の加筆修正	○よい文章の評価の観点と、文章の書き方として満たしておかなければならない条件に沿って文章を読み返し、必要な場合は加筆修正するように促す。そうすることによって、自力でよりよい文章に改善していけるようにする。 ☆他者に伝えるよう表現を工夫しながら、絵から読み取ったことと感じたことを関連づけて文章に表すことができている。	
	4 書き終わった児童同士で文章を読み合い、観点に沿ってお互いの文章を評価し合う。 ・友達の書いた文章のよさの発見 ・自分が書いた文章のよさと課題の発見	○よい文章の評価の観点と、文章の書き方として満たしておかなければならない条件に沿って文章を読み合い、評価し合う。そうすることによって、自他の文章のよさにさらに意識的になれるようにする。 ○児童がよい評価をしたものの中から何点か紹介し、よさを全体で確認し共有できるようにする。	評価を書き込むカード
かく に ㊩ (5)	5 学習のまとめをすると共に、ふり返しをして自他のよさを確認する。 ・わかったことやできるようになったことの確認 ・自分や友達のよさの確認	○学習を通してわかったことやできるようになったことをまとめとして記述し、それぞれの中にしっかり残るようにする。 ○学習への取り組み方の観点から授業を振り返ることによって、自他のよさに気づくことができるようにする。 ○児童の学習への取り組みを賞賛すると共に、次時の見通しをもたせ、意識を次へとつなげる。	ふりかえりシート

Ⅲ 考 察

授業を終えて気づいた課題は、次の3点である。

- ある一定量の文章は書けているが、こちらが当初思い描いていた表現の例を使った文章が書けていない。
- 「ぼくは、・・・と思う。」「わたしは、・・・と考える。」など、今まで使ってきた表現から脱却できていない児童が少なからずいた。
- 学習内容が多すぎて、学習活動が45分の枠に収まりきれいでなかった。そのため終始時間に追われ、書いたものの評価の部分に時間が割けず、よさの価値付けや共有が不十分になってしまった。

改善策としては、主に次の三つの方法を考えている。

- ① 定型の表現をできるだけたくさん使うというところに児童の意識を向けて、書く活動に入る。

定型の表現を使うことによって、読み取ったことや感じたことを関連づけて文章に表すことができる。また、そうすることによって絵から何を読み取り、何を感じたのか相手に伝わる文章に近づけることができる。文章を書く前に、「表現の例がどれぐらい使えているか後で聞きます。」等の声かけがあれば、児童の意識が高まっていたのではないだろうか。

- ② サルや植物など、絵の中の何に目を付けるのかを指定し、同じところに視点を当てる中で、みんなで歩調を合わせて文章を書いていく。

今回の授業では、児童が注目したところが多岐にわたり、よい文章の書き方について同じ視点で吟味すると言うことが難しくなっていた。こうすることによって、書く活動に割く時間を短縮することができるし、お互いの文章のよさの評価が容易になり、よい表現をクラス全体で共有することができるようになる。

- ③ ゴール地点をしっかりイメージし、そこにたどり着くための手立てをしっかりと練った上で、これだけはできるようにするというシンプルなねらいのもとに授業をつくっていく。

これは、単元構成に関わることである。

①文章を書く→②読み返し、加筆修正する→③ペアで文章を見合い、評価する→④広く文章を見て回り、よいものを見つけ皆で共有する→⑤まとめとふり返しをする
学習内容が盛りだくさんで45分間に収まりきれいでないがために、「書くこと」と「評価し合いよさを共有すること」のどちらも中途半端になってしまった。「書く」活動と「評価」する活動を分けるべきであったと考えている。書く活動を前の時間から始

めていれば、前述した定型の表現を思ったほど使えていないという問題にも対処することができただろうし、文章を評価し合い、よさを皆で共有するということをもっと丁寧に、徹底してできていたように思う。

以上述べてきたように、こちらが考えていた以上に、児童の中には「定型の表現を使う」「お互いの文章のよさを評価し合い、よさを共有する」ところに難しさがあり、そこをスムーズに越えられるようにする手立てが必要だったことが明確となった。

今回、文章を書くことを比較的得意とする児童が、それまでの自分の表現から脱皮できず苦勞していたが、逆に普段書くことを苦手とし、初めなかなか書き出せなかった児童が、最終的にこちらが意図するような文章を書くことができたという事実があった。自分のスタイルに固執してしまうと、ねらいを達成することが難しくなるが、逆に教師の用意した文章のフレームを使うなど、教師の力を借りて新しいことに挑戦することができれば、ねらいを達成できることがある。言い換えると、様々な方法を駆使して記述の仕方、様式を丁寧に教えていくことができれば、書くことを苦手とする児童であっても、ねらいに沿った文章を書くことができるのである。

V おわりに

国語科の授業研究を通して見えてきたことが三つある。

一つ目は、児童の力の分析と教材研究の大切さである。この教材を使って、児童に何を教え、何をできるようにするのか、ゴール地点の児童のイメージを明確にもつことが、よい授業の成否を決めると言っても過言ではない。ゴールに向かってどの道を取ればよいのか、問題や課題を明確にすることによって、学習内容や学習方法が見えてくる。時には思い切って無駄を省くことや、既成概念にとらわれず、学習の流れや内容を決めることも必要である。

二つ目は、学習のめあてを分かりやすく提示することの大切さである。児童がゴール地点をイメージすることができれば、迷いなく進むことができ、成果を着実に積み重ねることができる。

三つ目は、児童の力に合わせた指導を丁寧に積み重ねていけば、児童の書く力は着実に向上していくということである。記述例をもとにより文章のポイントを分かりやすく示したり、文章のフレームを与えたりするなど、よいタイミングで児童の背中を少し押すような支援ができれば、どの児童も教師のねらいにそった文章が書けるようになるのである。

まだ研究として不十分なところもあるが、これからも真摯な態度で児童や授業と向き合い、学校全体で地道な努力を積み重ねていく。そうすることによって、児童の書く力の向上、記述力の育成に努め、そこを土台に思考力を駆使して自ら主体的に問題に取り組み、よりよい答えを見つけ出すことができる児童を育てていく。

